

論文の要旨

本論文は、『三国志演義』諸版本の本文比較、及び同書執筆時に利用された歴史書との関係の精査を通して、『三国志演義』の成立過程を解明するとともに、そこから大衆の読書という行為がどのように誕生し発展してきたという問題をも考察しようとするものである。

まず第一章『三国志演義』の原初段階における成立と展開—段階的成立の可能性—においては、まず先行研究を総括した上で、現存最古の『三国志演義』版本である嘉靖壬午序本と葉逢春本について詳細な検討を加え、内容は同一でありながら大きく異なる本文を持つ両者は「原演義」と呼ぶべき今は失われたテキストからそれぞれ出ていること、歴史書との一致度や文章のレベルから考えて、刊行年代に関わりなく葉逢春本の方が原演義に近い本文を持ち、嘉靖壬午序本は原演義の本文に洗練を加えようとして書き換えを行ったものであることを実証し、版本間の校勘から、原演義から各版本に至る過程でどのような変容が生じたかを明らかにする糸口となりうることを指摘する。更に、葉逢春本と各種歴史書との比較から、『三国志平話』もしくは同種のもを下地として、創作を加えつつ『三国志』と『資治通鑑綱目』の二書を順次用いて肉付けを施すことにより、二段階にわたる作業の結果、葉逢春本とほぼ同じ本文を持つ原演義が作られ、それに文章の洗練等を加えることにより嘉靖壬午序本ができあがるという『三国志演義』成立の見通しを提示する。

第二章『三国志演義』三系統の版本の継承関係—劉龍田本を手がかりに—においては、商業上の目的から内容を簡略化したテキストにすぎないとして従来軽視されてきた簡本に着目し、その一つである劉龍田本について論じる。従来劉龍田本は、葉逢春本などの建陽系のテキストを簡略化したものにすぎないと見なされてきたが、詳細に検討すると、前半は確かに葉逢春本を簡略化したものといってよいものの、後半は葉逢春本と嘉靖壬午序本の間と言わなければならない本文を持つ。これは、原演義と嘉靖壬午序本の間には今は失われたテキスト（以下「簡本系祖本」と呼ぶ）が存在し、劉龍田本はそれを簡略化したものであることを示している。劉龍田本と葉逢春本の異同が後半になると大きくなり、嘉靖壬午序本と合致しはじめるということは、原演義の文体が前半と後半で大きく異なっており、前半がある程度洗練されていたのに対して後半は稚拙であったため、後半に改変を施したのが簡本系祖本、更に全体に改変を施したのが嘉靖壬午序本であることを示すものであり、そこから原演義は前半と後半で執筆者・執筆時期が異なっていた可能性が浮上する。また、人物像も後になるほど知識人向けに洗練されていく傾向が認められるとする。

第三章『三国志演義』三系統の版本の継承関係—異同の全体像から見た成立過程の考察—においては、『三国志演義』全篇にわたって、葉逢春本（葉逢春本が欠けている部分についてはほぼ同文の余象斗本を使用）・劉龍田本・嘉靖壬午序本という三系統版本の本文を精密に比較した上で、序盤・中盤・終盤について、三者の関係が見て取れる事例を多数あげて、第一章・第二章で述べた三系統の関係を具体的に実証する。その結果、葉逢春本が原演義に近く、原演義に第一次の書き換えを施したのが簡本系祖本、それを簡略化したのが劉龍田本などの簡本系諸

本、簡本系祖本に更に書き換えを施したのが嘉靖壬午序本であることが裏付けられる。更に、序盤・中盤・終盤で異同の状況が異なることも確認される。序盤では劉龍田本はほぼ葉逢春本と一致しているのに対し、中盤、赤壁の戦い以降、劉龍田本は嘉靖壬午序本に一致する割合が高くなり、更に終盤、劉備の死から嘉靖壬午序本に一致する割合が劇的に上昇する。これは、序盤・中盤が早くに成立し、文章のレベルも高かったのに対し、後に文章力の未熟な人物が執筆した終盤が追加されたため、簡本系祖本段階で大幅な書き換えが施されたことを示すものと指摘し、原演義は基本的に主人公劉備の死で終わっており（五丈原など重要な箇所のみ簡単に書かれていたかもしれない。これらの部分は葉逢春本と劉龍田本の異同が少ない）、後に三国終焉まで描くべきだという要求に基づいて相補されたのではないかとする。

第四章「関索説話に関する考察」においては、『三国志演義』研究において長く問題とされてきた関羽の架空の息子関索について論ずる。葉逢春本・嘉靖壬午序本には関索の名は見えないが、他の葉逢春本に近い本文を持つ建陽で刊行された版本には「花関索」、嘉靖壬午序本に近い本文を持つ周日校本などの版本と簡本には「関索」の、それぞれ異なった内容の物語が認められる。このうち「花関索」については、後から挿入されたものという従来の説で間違いのないものと思われるが、「関索」については、やはり後からの挿入になるという定説には疑問がある。関索の活躍はほとんど南蛮征討の部分に限定される。そこでは、いずれの版本においても内容に不自然な点が認められ、元来は関索の活躍であったものが魏延や馬岱に書き換えられている形跡があり、他の矛盾点も勘案すると、原演義の時点ですでに存在した関索の物語が書き換えられていたものと思われる。その結果、内容が不自然になったため、葉逢春本では関索説話は完全に削除されたが、簡本系祖本はそのまま継承し、劉龍田本と周日校本は、従来の説のようにどちらかがどちらかから取り入れたのではなく、各々個別に原演義のものを継承したものであると指摘する。周日校本は簡本系祖本の文章に洗練を加えつつ、関索の出番を減らしたが、なお不自然であったため、嘉靖壬午序本では完全に削除されたものと思われる。しかし、嘉靖壬午序本以外のテキストでは、やはり関索は民間で人気があったため残存する。ここに認められる継承関係は、第三章までの議論と一致するものである。

第五章「『三国志演義』の執筆プロセスに関わる考察」では、葉逢春本の本文を『三国志』（裴松之注を含む）・『資治通鑑』・『資治通鑑綱目』という三種の歴史書及び『三国志平話』と比較することによって、『三国志演義』の執筆プロセスの復元を試みる。呂布の最期のくだりは、明らかに『三国志平話』と『三国志』に基づいており、『三国志平話』もしくはほぼ同内容のものに『三国志』及び裴注で肉付けして作られたものと思われる。しかし、『三国志演義』には『資治通鑑綱目』に依拠している部分も多い。そこで更に夷陵の戦いの前後を検討すると、このくだりの主役である陸遜に関わる部分は『三国志』、サブキャラクターの部分には『資治通鑑綱目』が用いられていることが明らかになる。この作業が一度にされたとは考えがたく、おそらくはまず『三国志』によって『三国志平話』への肉付けが行われ、次に『資治通鑑綱目』により脇筋が増補された可能性が高い。一方、『三国志平話』には存在しない呉の物語を検討すると、時間軸が『資治通鑑綱目』と完全に一致する一方で、主たるエピソードは『三国志』から

取られていることから考えて、劉備に関わる本筋の物語とは別の人間が、異なった手法で創作し挿入したものと思われる。つまり、『三国志演義』は、①『三国志平話』に対する『三国志』による肉付け、②『資治通鑑綱目』によるサブキャラクターに関するエピソードの増補、③『三国志』と『資治通鑑綱目』を併用した呉に関わる部分の創作・挿入、という手順で制作されたことになるかと結論づける。

第六章『三国志演義』と『蜀漢本末』では、これまで『三国志演義』制作にあたって利用されたと指摘されてきた『三国志』『資治通鑑綱目』『資治通鑑』以外に、元の趙居信が著した『蜀漢本末』の存在を指摘し、南蛮征討部分の本文を詳細に検討して、『蜀漢本末』のみが内容・文面の両面において『三国志演義』と合致することを示すことにより、同書がこの部分を執筆するに当たって利用されたことを立証する。更に、『四庫全書総目提要』では『資治通鑑綱目』のつぎはぎに過ぎないと切り捨てられている『蜀漢本末』が、実は『資治通鑑』『郝氏統後漢書』『蕭氏統後漢書』など多様な書物を見た上で、細かい取舍選択を行った書物であることを指摘して、同書の再評価を行うとともに、その刊行者が建安書院山長であり、『三国志演義』成立の重要な場であった建安では元代当時入手しやすい書籍であったことを述べる。更に、合肥の戦いの叙述においては『三国志演義』の執筆者は『三国志』と『資治通鑑綱目』を両方参照していることを指摘し、南蛮征討の部分とは執筆方法が異なること、そもそも文体自体が前半と後半では大きく異なることを指摘する。

第七章『三国志演義』の基づいた歴史書—終盤を中心に—では、前章までの議論を踏まえて、『三国志演義』結尾の蜀・呉滅亡と晋による統一の部分における史書の利用法を分析する。この部分はほとんど史書の記述をつなげただけの面白味のないものであり、その点でも序盤・中盤との違いは明らかである。更に、蜀滅亡の部分は主として『三国志』を利用しているが、その手法は多くの伝に幅広く目を通して再構成するというものであり、序盤・中盤における主要人物の伝のみ利用する手法とは全く異なる。晋の成立以降は、『三国志』には記述がなくなるが、『晋書』を利用した形跡はなく、『資治通鑑綱目』によっている。一方で、この部分でも『蜀漢本末』に基づく部分も認められる。いくつかの史書から文章を取ってきてつなぎ合わせるといふ手法は、商業出版の中心地であった建陽（建安はこの地区に属する）の書坊が明代に続々と刊行した「綱鑑」と称する通俗的中国通史の編集法と酷似しており、『蜀漢本末』が建安で刊行されたことと合わせて考えれば、この地区の書坊が通俗史書編集のノウハウを応用して執筆したものではないかと思われるとする。

「結語」では、これまでの議論を総括して、『三国志演義』が段階的に成立してきたこと、その過程で、本論においては「簡本系祖本」と名付けた今は失われたテキストが存在したこと等を確認して、『三国志演義』の成立過程の全体像を描き出す。そして、そこに大衆の読書という行為の発生過程、即ち民間で楽しまれていた大衆文芸を素地とし、それを営利出版と結びつけようとする書坊（出版社）の介入を経て、多くの読者を取り込み、書坊が出版競争の中でより洗練されたテキストを送り出し、それが大衆の読書という行為のレベルを引き上げるといふ現象の過程が認められることを指摘して、結論とする。